佛立開導日扇聖人物語 第16回

荒れたお寺で誰も近寄らなかった宥清寺に開導聖人がお入りなられてからは、ご信者が増えていき、お参詣の人でにぎわうお寺となったんだ。そして【高祖六百回御遠諱】をお迎えするにあたり、宥清寺の建物をつけ加えたり、新しくつくりなおしたりと、宥清寺は次第に立派なお寺になっていったんだ。こんな宥清寺に盗賊（泥棒。ぬすびと）が入るんだ。今回は「宥清寺の盗難（お金や物を盗まれること）事件」のお話しをするね。

宥清寺の盗難事件

【高祖六百回御遠諱】を終えた翌年の明治十五年二月二十七日の夜。なんと宥清寺に盗賊が入ったんだ。そして、お金と衣類を全部奪って（人のものを無理に取り上げて）逃げ去ってしまったんだ。

宥清寺に入った盗賊は九名で、白刃（さやから抜いた刀）を持っていたというから怖いね。でも、ケガ人もなく、盗賊も数日後には捕まったんだよ。

この宥清寺の盗難事件を知った他宗の寺々は、佛立講が発展しご信者が増えていることを妬んで（うらやましく思って憎んで）いたので、今がチャンスとばかりに佛立講や開導聖人に攻撃をかけてきたんだ。

明治15年２月27日夜、九人の盗賊が宥清寺に押入った

「宥清寺の御尊像（日蓮聖人の像・平成二十七年十二月号の《高祖手自開眼の御尊像》を参考にしてね）は、魂（こころ、精神）が抜けて人々にご利益を与える力はない」等と悪口をいいふらし、開導聖人を困らせようとしたんだね。

でも開導聖人は、このような嫌がらせをいっさい取りあわず、逆にこの盗難事件によって、『三つの喜び』を感じることができたと仰られたんだ。

鳳凰形燭台　開導聖人がデザインされ作成されたもの

三つの喜び

その三つの喜びとは…

一つは、はじめ宥清寺がとても荒れた貧乏寺で誰も近寄らなかったのが、盗賊にねらわれるまでに、発展して豊かなお寺になったこと。

二つは、盗賊は刀を持った凶悪犯（残忍でひどい行為をすること）であったのに誰もケガをしなかったこと。

三つは、ちょうど本堂の灯籠（あかりをともす器具のこと。石、金属、竹、木などで作られている）の代金を支払った後だったので、お店の人などに迷惑をかけずにすんだこと。

普通の人だと、盗賊に、お金や衣類を持っていかれれば、怖がったり、落ち込んだりするよね。だけど開導聖人は盗難という災難（思いがけず身にふりかかってくる不幸なできごと）を、むしろ喜びの気持ちに変えられるんだから凄いよね。こういった開導聖人のような「プラスの考え方」を持つことが、活力を生み出すこととなり、困難を乗り切る大きな力となるんだね。見習わなくっちゃね。

黒漆塗筆箱と御筆

▶携帯用のお弁当箱

◀ご愛用されためがね